連　載
第45回

# 木造住宅におけるスケルトンインフィル

㈱ソーラーデザイン研究所　所長　村井 正

## くつろぎの空間⑦

前回はスリランカの建築家、ジャフリー・バワの住宅作品を取り上げました。そこで興味深いのは「スケルトン・インフィル」、つまり「建物本体」と「内容物」（この場合は「展示物」）の関係が、普段我々の考えているとらえ方、すなわち「本体」は固定され変わらないもの、「内容物」は変化するもの、とは逆転していると指摘しました。今回は他の建築家の例をご紹介したいと思います。

ルイス・バラガン（1902～1988）はスリランカとは太平洋の反対側、メキシコの著名な建築家です。世代的には前川國男（1905～1986）と同世代と言えます。つまり、近代建築の巨匠である、ル・コルビュジェ（1887～1965）の影響をもろに受けた世代です。事実、前川がそうであったように、バラガンもル・コルビュジェの建築思想とメキシコの風土の融合を図った作品を多く作ります。1970年代からそのシンプルでカラフルな建築で世界でも知られるようになり、1980年には（建築界のノーベル賞と言われる）プリツカー賞を受賞します。バラカンが建築界でユニークな存在と思われていた理由のひとつが、建築教育を受けていない点です。土木の学位を持っていましたが、建築に関しては独学です。その点は、たとえば安藤忠雄さんと同じですが、設計プロセス驚くほどユニークでした。

「バラガンは直接図面を引くことはほとんどなく、基本的にはアシスタントが図面を引いていました…アイディアを伝え、アシスタントが線を引くと、ここはもっとこうだ、と口頭でより詳しく伝える、というコミュニケーションが設計の過程で行われていました。現場でも実際に建てた壁の様子を見て、建てては壊しを繰り返し、実空間で細かい検討を行っていました」（バラガンの研究家、カタリーナ・コルクエラのインタビュー「ルイス・バラガン　空間の読解」彰国社）

建築、それもプリツカー賞をとるほどの素晴らしい建築作品が建築家自身のスケッチや図面なしに出来上がったということに驚かれる方もいらっしゃるかも知れません。実は前回取り上げた、ジャフリー・バワも自ら図面を描かない建築家でした。

ルイス・バラガン邸　階段ホール

二人にはまた、裕福な一族だったこと、長い年月をかけ自邸を完成させたという共通点もあります。そしてそのインテリアも単に建築的に仕上げられているだけではなく、展示物